

作品紹介：

跡見花蹊筆「万山 暈 翠図」・跡見女学校生徒合作「花卉図」双幅 (長野市、真田宝物館蔵)

跡見学園中学校高等学校 学校長
嶋田 英誠

はじめに

1. 跡見花蹊筆「万山暈翠図」
2. 跡見女学校生徒合作「花卉図」
3. 作品の所蔵者、真田輯子

おわりに

はじめに

長野市松代は、江戸時代には松代藩十萬石の城下町であった。藩主は真田氏、今日の真田宝物館はその代々の遺品を管理収蔵している博物館である。ここに、跡見花蹊（1840.4.9-1926.1.10）筆「万山暈翠図」軸と、跡見女学校生徒合作「花卉図」軸とを双幅に仕立てた作品が収蔵されている。筆者は2010年8月26日ここを訪れ、この作品を拝見させて頂いた。

二幅を納める箱の表に、

「華蹊女画山水 一幅
同塾生合作画 一幅」

と記され、蓋の裏には

「明治十二年卯三月 桐印」

とある。「華蹊女」は跡見花蹊、「明治十二年」は1879年。お世話して頂いた学芸員の方の御教示によると、「桐印」とは、松代藩最後の第10代藩主真田幸民（1850.4.17-1903.9.8）の三番目の夫人輯子（1864.4.11-1928.10.15）のお印を意味し、この作品は輯子が嫁入り道具として持参したものだという。なお、箱の裏書は極めて鮮明だが、箱表は相当程度傷んでいる。

画は、両幅は本絹の寸法が一致しているほか、裱装も全く同一である。一文字に「五七の桐」紋を意匠した錦を使用しているのも、輯子の御道具となることを前提としたものであろう。保存状態は極めて良好である。

初見から三年を経たが、そののち得られた知見も一二あるので、あらためてここに紹介することとしたい。（なお、筆者は当時ホームページ『（跡見学園）常務理事室からの花便り』第151便「松代の真田宝物館」に概略を紹介したが、今は見解を改めた部分がある）

1. 跡見花蹊筆「万山暈翠図」

花蹊の「万山暈翠図」軸は、絹本墨画、本紙の法量は125.4×71.8cm。向って左上に、題記と款印がある。

「万山暈翠

己卯（明治12（1879）年、花蹊39歳）春日写於
三宜楼中

花蹊跡見瀧 「跡見瀧印」白文方印（瀧字のみ朱文）、「華蹊」朱文方印

「万山暈翠」とは「多くの山々に、樹木の緑が幾重にも重なりあう」意、夏の画題であり、（少なくとも漢土では）旺盛な生命力、一族の繁栄などが含意されていた。「己卯」は明治12（1879）年に当る。花蹊が神田中猿樂町に跡見女学校を開いたのは1875年11月だが、それより3年と少しを経た後の作品である。「三宜楼」は花蹊の室号。「瀧」は花蹊の本名、「花蹊」はその号。なお、画面右下に遊印として「鳳有高梧鶴有松（鳳に高き梧有り、鶴に松有り）」朱文方印が押捺されている。

花蹊の山水画は、幕末に京都で日根野対山（ひねの・たいざん、1813-1869.3.13）に学んだ南画様式に立脚するもので、この作品は正統的な南画風を示している。画かれているのは、煩瑣な日常業務から解放され、盛夏の城市の炎暑と喧騒から逃れ、

山中溪辺の茅屋中に一人、心のびのびと書を読む士大夫である。これこそ中国における文人たちの憧れの姿であり、「鳳有高梧鶴有松」の遊印に込められた高踏的な文人の在り方そのものである。

このように、「万山疊翠図」は極めて漢学趣味の強い作品である。そもそも跡見花蹊の漢学は、故郷の摂津木津村で父の跡見重敬（1809.8.1-1889.6.15）に小学を仕込まれ、学問と絵画に志してよりは京都で宮原節庵（1806.10.8-1885.10.6）に、大坂北浜で後藤松陰（1797.1.8-1864.10.19）について、本格的に漢籍詩文を学んだものである。当時、漢文漢字は男性の親しむ分野であり、女性には和歌仮名文字をならうのが一般的であったが、花蹊はいわば男性文化を身につけ、一人立ちしたのである。この作品は、そのような花蹊の面目をよく示す作品と言えよう。

ただし、花蹊の山水画の中には、粗縦な筆や濃い墨色を駆使して、より強く表現主義的な画風を示すものがあり、それらに比すれば、「万山疊翠図」はややおとなしく、典型的な作品といえることができる。

2. 跡見女学校生徒合作「花卉図」

跡見女学校の生徒七人による合作「花卉図」軸は、絹本墨画、花蹊の「万山疊翠図」と同大。画面の上から下、向って右から左へと、描かれたモチーフと落款印章を見て行こう。

題字「美矣」 款「三条智恵子」六歳、印「藤原氏」白文方印、「智慧子章」朱文方印、関防「嘉福」白文橢円印。

梅：款「後藤^{こづえ}梢^か写梅花^{すみこ}」年十二、印「後藤氏」白文方印、「華萼」朱文方印。

竹：款「挿竹者^{すみこ}板倉^{すみこ}棲子^{すみこ}」十二歳、印「板倉氏印」朱文方印、「棲之印」白文方印。

菊：款「作菊者^{すみこ}花香^{までのこうじ}（萬里小路伴子）」年十二、印「華香」朱文方印。

花瓶：款「花^か洲^{しゅう}（萬里小路^{ももこ}李子）」製年九歳、印「華洲」朱文方印。

牡丹：款「花山^{かざん}（福田君子）写牡丹」年十三、印「福田氏」白文方印、「華山」朱文方印。

蘭：款「写蘭者^{すみこ}」（三条西）浜子七歳、印「藤原氏」白文方印、「浜子之章」朱文方印。

これらの筆者たちは、いずれも最初期の跡見女学校の現役の生徒である。それぞれ簡単に略歴を記す。

三条智恵子（1872.5.25-1947.3.19）。旧公卿^{さねとみ}三条実美（1837.2.7-1891.2.18/19）の長女、号は花隄^{かてい}（隄は「つみ（堤）」）。父は、1870.12東京に移居、1871太政大臣。1884公爵。1885内大臣。1889.10-.12兼内閣総理大臣。智恵子は、1877跡見女学校入塾、1885.12.25卒業退校。のち1891.12.19閑院^{かんいんのみやことひと}宮^{かんいんのみやことひと}載仁親王（1865.9.22-1945.5.20）と結婚した。夫は、1878.8親王宣下。1882陸軍幼年学校を卒業、フランスに留学。1891帰国。1911陸軍大将。1919元帥。1931-1940参謀総長。智恵子は、皇族妃として多くの公務に従う一方、恭子・茂子・季子^{すえこ}三女王を跡見女学校に通学させるなど、永く跡見花蹊の庇護者となった。

後藤^{こづえ}梢^か（生卒年不詳）、号は花萼^{かかく}。もと土佐藩士後藤象二郎（1838.3.19-1897.8.4）の女。父は1867新政府に仕え、1873.10依願退官。これより実業界・政界で活躍。1875.4-1876.3元老院議員・副議長。1889-1892通信大臣、1892-1894農商務大臣。梢は、1875.6.13跡見塾に入塾している。

板倉^{すみこ}棲子^{すみこ}（?-1886.5.17）。板倉^{かつみち}勝達（1839.5.1-1913.7.16）の次女。板倉家は、代々陸奥福島3万石の藩主であったが、1868戊辰戦争の結果、父勝達は1869.1三河重原藩2万8千石に転封、1871.7廃藩置県により免官。のち1884子爵、1890貴族院子爵議員。棲子は、1875.4跡見塾に入塾した。のち島津忠義（1840.4.21-1897.12.26）と結婚、その三人目の妻となる。夫は、もと薩摩鹿児島藩77万石最後の藩主。1884公爵、1890.2貴族院公爵議員。ただし忠義・棲子の結婚は（忠義の二人目の夫人の歿年から考えて）1880以降のことであり、棲子は嫁して数年にして歿したと思われる。

萬里小路^{までのこうじ}伴子^{みちふさ}（1867.1.29-1951.9.10）、号は花香。旧公卿萬里小路通房（1848.5.27-1932.3.4）の長女、母は八重子（1850.7-1897.11.16）。父は維新に当り新政府の中枢に位置した。のち永く宮内省に奉職、1882-1890侍従。1884伯爵、1890-1924貴族院伯爵議員。伴子は、1873.1.11跡見女学校入学、1874.1.17入塾。1883.9.29堀田正倫^{まさとも}（1851.12.6-1911.1.11）と結婚、その後妻となった。夫は、もと下総佐倉11万石の最後の藩主だが、廃藩置県後東京深川に居住した。1884伯爵。1890.11佐倉に帰り、地域振興に尽す。佐倉の堀田家は正倫歿後しばらくして家運衰え、晩年の伴子は、1933頃より跡見女学校内（今日の文京キャンパス内）に家（成蹊館）を建てて住んだ（跡見純弘氏談）。

萬里小路^{ももこ}李子^か（1868.10.18-1956.12.17）、号は花洲^か（洲は「しま」）。萬里小路通房の次女、母は八重子、萬里小路伴子の妹。前項を見よ。李子は、1874.1.17姉伴子と共に跡見女学校に入塾。1889.9.30跡見花蹊の養女となり、同校學監を経て、1919第二代校長。その養子は跡見純弘^{すみひろ}（1922.6.23生）、学校法人跡見学園の前理事長、現顧問である。

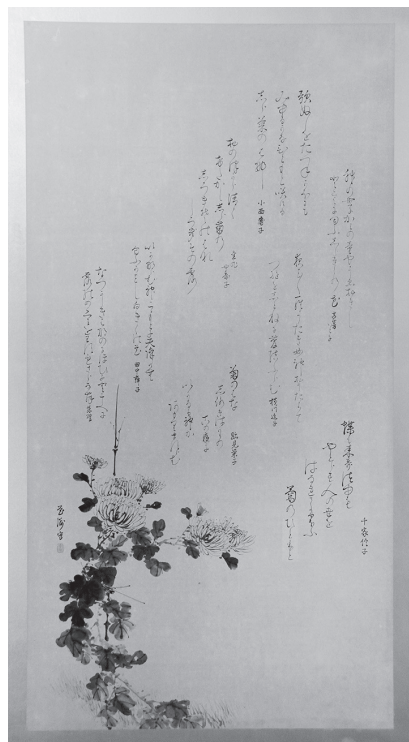
福田君子（生卒年不詳）、号は花山。東京銀座の福田政治郎の女。1871.4.24跡見花蹊に入門（『跡見花蹊日記』同日条。但し『跡見花蹊略歴』によれば1870.12.25）。1870.11京都から東京に移ってきた跡見花蹊の、東京における最初の弟子である。

三条西浜子（1870.12.27-1922.7.28）、号は花曉。旧公卿三条西季知（1811.2.26-1880.8.24,1870.12.2隠居）の6女、三条西公允（1841.5.22-1904.6.13,季知の男,1870.12.2家督相続）の妹。1875秋の跡見女学校開校時の集合写真に、その姿が見える。のち婿養子を迎え、三条西実義（1866.11.29-1949.5.28）夫人となる。夫は、公卿風早公紀（1841.8.21-1905.2.28）の長男、跡見生風早愛子（1861.4.4-?）・純子（1865.10.2-?）姉妹の弟。のち三条西浜子と結婚して三条西公允の養子となり、その歿後家督を嗣いだ。官は式部官・神宮大宮司などを歴任。なお、1875.6.15風早純子と共に跡見塾に入門した風早義丸（『跡見花蹊日記』同日条）とは、この人であろうか。もしそうだとすると、三条西実義・浜子夫婦は、ともに跡見花蹊の弟子であつたことになる。なお、跡見学園女子大学文学部が2002以来設置している「香道実習」は御家流であるが、三条西家は代々その家元である。

作者達の内、生年月日が判る生徒が四人いる。落款には制作時の歳を記しているから、逆算すればこの作品の制作年代が判るはずだ。単純明快には行かないが、制作時期を1878（明治11）年5月25日から10月17日の間と仮定し、萬里小路伴子は数え年を記し、萬里小路李子・三条西浜子・三条智恵子は満年齢を記したものと考えれば、四人の款記と合う。双幅の片方、跡見花蹊筆「万山疊翠図」の前年の、夏から秋の間の制作である。なお、箱書に「塾生合作」とあつたが、上の福田君子以外の六人は、「お塾」の寄宿生であつたことが確認できる。

作品は、水墨による所謂「花卉雑画」である。ことに清の揚州八怪が得意としたもので、ここでもそれに倣っている。花卉を画いても写実性を求めるわけではなく、書と同じで筆遣いの妙味を味わうべきものであり、ここでも少女たちの腕の競い合いが見るものを感じさせる。雅宴などで文人たちが席画で合作することも、漢民族社会では今日に至るまでしばしば見られることで、それ自体は珍しいものではない。

ところで、これと似た別の「花卉図」屏風（二曲一隻）が、跡見学園女子大学花蹊記念資料館にある（下図）。これも多くの生徒達の合作の体裁をとり、時代は下って明治30年代初めの生徒たちの名が並ぶ。しかし松代本と異なり、生徒たちの印が押されていない。向って左幅の左下に、「花洲写」「華洲」（跡見李子の号）の款印のみがある。そしてつぶさに観察すると、生徒達の落款だという書入れは、すべて一筆である。画もまた然り。とすれば、資料館本の筆者は跡見李子だと考えるのが妥当である。つまり、これは生徒達に画かせる合作花卉図の設計図であり、同時に、（落款の内容まで書き示しているのであるから）生徒たちに与えた手本・指示書なのであろう。松代本も、一見即興制作かと思わせるように作られてはいるが、（建築に例えれば）じつは棟梁による綿密な設計図に基づき、よく訓練された何人もの職人たちが作り上げた建物のようなものであり、その棟梁は跡見花蹊、手足となった職人が少女たちと考えられよう。七人の職人には確かに腕前の差がみられ、棟梁は難易度を考慮してそれぞれのモチーフをそれぞれの少女に割り当てているようだ。



本図がどのような機会に何の目的で作られたのかは分らないが、幼い少女たちの作品なのだから、芸術としての出来栄を云々すべきものではない。さはさりながら、このジャンルは、(跡見花蹊が「万山疊翠図」中に画きこんだような) 中国の文人たち(当然、成熟した男性である)が、その高踏的な精神生活の一部として実践してきた芸術であるのだから、年端もゆかない少女たちが習作とはいえこのような作品を作ったことには、大人の男たちはびっくりし、感嘆した。花蹊は、しばしばこれらの少女たちを引き連れて、その家族や、貴人や、外国使節らの前で席画を披露させている。当時の清国駐日公使何如璋(1838-1891)は、書画は自国のお国芸であるだけに、日本の稚い少女たちが見事に筆を揮うのを目の当たりにして驚嘆し、やんややんやの喝采をした(跡見花蹊『彤管生輝帖』、1880)。このようなパフォーマンスは、生徒達の社交性と自立性を確実に育てていったことであろう(他面、跡見女学校の広報のための重要なアイテムでもあっただろうが)。しかし跡見花蹊のこのような教育の真の目的は、文化や芸術の深い理解力・鑑賞力(「目」)を身に着けさせ、その実践性・発信力(「手」)を涵養し、男性中心の当時の社会の中に在って男性たちに引けを取らず、これに伍してゆけるような文化人・教養人としての自己実現(「心」)を達成させ、そのことにより自律・自立の近代女性を育成することにあったのだろう、つまり跡見学園に古くから伝えられてきた「目と手と心」という教育標語の内容の、少なくともその一部なのだろうと、今の筆者は考えている。

3. 作品の所蔵者、真田輯子

さて、「はじめに」に記したように、この作品を裱装し、所蔵していたのは真田輯子である。この章では、真田輯子について紹介する。

真田家は、既述したように代々信濃国松代藩10万石の藩主の家である。ただし輯子の夫、真田幸民は、もと伊予宇和島11万石藩主伊達宗城(1818.8.1-1892.12.20)の男であつた。松代藩第9代藩主真田幸教(1835.12.13-1869.10.18)は体が弱かつたので、請われてその養子となり、1866.3.9隠居した幸教の家督を嗣いで、その最後の藩主となった。明治に入り1884子爵、1891伯爵。妻は、先後三人迎えている。先の夫人は隆(?-1884.8.27)、肥前大村2万8千石藩主大村純熙(1830.11.21-1882.1.12)の次女。二人目の夫人は宏子(1864.8.29-1899.6.12)、日向飢肥5万1千石藩主伊東祐相(1812.8.12-1874.10.21)の女。輯子は、その三人目の夫人である。

輯子の実家は、清和源氏の流れを汲む公卿竹内家。父は竹内治則(1836.8.21-1888.8.8)、明治に入り1884子爵。輯子はその長女であるが、妹に次女田鶴子(1870.11.1-1948.1.31)があつた。この二人の姉妹はともに跡見女学校に学んだことが、跡見校友会誌『汲泉』第5号(1902.5)に載せられた「跡見校友会々員名簿」によって知られる。

全(東京市) 芝区琴平町二番地 (伯爵真田幸民君夫人)	(竹内) 真田輯子
東京市麹町区三年町四番地 (島津忠済君夫人)	(竹内) 島津田鶴子

ただし、どちらも入学・退学の時期は分らない。また1875秋の跡見女学校開校時の集合写真には、まだその姿はない。

ところで、真田幸民の二人目の夫人の歿年と、校友会会員名簿の記載から推すと、輯子が真田家に嫁いだのは1900から1902春の間のこととなる。このとき輯子は数えて37乃至39歳であるから、初婚とは考えにくい。まして況や、嫁ぎ先が51乃至53歳の男性の、三番目の妻であるにおいてをや。(『平成新修旧華族家系大成』等の工具書類は、輯子のこれ以前の結婚について全く触れないが、何かの事情があるのであろう。)

妹の田鶴子が嫁いだ島津家は、薩摩藩主島津宗家の分家で、1871.9に島津久光(1817.10.24-1887.12.6,1884公爵)が立てた家である。夫君の島津忠済(1855.3.9-1915.8.19)は、久光の六男、父の歿後1888.1.25、34歳で公爵家を継承した。のち1890貴族院議員、1900には麝香問祇候を仰せつけられた。田鶴子がいつ島津忠済に嫁いだのかは分らない。当時の跡見女学校の生徒達が多くは十代後半前後に結婚していることから、仮に田鶴子が18歳で結婚したものと仮定すると、それは1887年、夫忠済は34歳、義父久光は81歳の老公爵であつた筈である。余談だが、1902.1.12の午後、跡見花蹊は数軒の年賀廻りののち、島津忠済邸を訪問した。

「公爵島津家を問ふ。田鶴子様に御目に掛り、御酒肴夕餐を戴く。久々にて古しへの御物語なとして、夜に入て帰る」
(『跡見花蹊日記』同日条)。

この時花蹊は63歳、田鶴子は33歳。30歳年下の嘗ての教え子を様附けて呼ぶのは、相手が今や公爵夫人だからである。「久々」の対面であつたが、花蹊の筆運びからすれば、大変になごやかな再会であつたようだ。

島津久光と言えば、姉の輯子はその養女に入っている。当時、婚姻、養子などの縁組に当り、おもに箔づけのためであらうが、女性が一旦他家の養女となつてから縁づくことがしばしば行われた。例えば、先述したように萬里小路李子は1889.9.30跡見花蹊の養女となつたが、それに先立ち、9.28姉小路公義(1859.4.4-1905.1.7,1884伯爵)の義妹となつている。何故その必要があつたのか今日では理解しにくいものがあるが、姉小路家は跡見一家の主家であるから、両家の結びつきを一層強いものにするためであつたのかもしれない。竹内輯子が島津久光の養女となつた時期、事情は知りえなかつた。しかしながら、島津久光

は維新の一大功労者である。1884五等爵制度が発足したとき、輯子の実家の父竹内治則は、旧公家であるのに子爵を授けられるに過ぎなかったのに対し、島津久光は大名の分家でありながら公爵を授けられた。文字通り格段の差がある。そのような名家にいつ、何故に輯子は養女となったのか、今のところ不明である。(輯子の、隠された最初の結婚と関係が有るのかもしれないが、島津家と竹内家の間のそもそもの繋がりが、筆者にはまだ見えない。)

さて、冒頭の絵画作品の問題に戻ろう。繰り返すと、生徒合作「花卉図」は1878.5-10の間の作、跡見花蹊筆「万山疊翠図」は1879春の作、輯子がこれらを袂装させて完成し、箱書が認められたのが1879.3であった。この頃、竹内輯子は数えて15-16歳であった。適齢期に近い。

ここからは、断片的な知見に基づく、筆者の推測であるが・・・、

竹内輯子は1876(13歳)ころ跡見女学校に入学したのだろう(入塾したかどうかは分らない)。生徒合作「花卉図」の作者たちは、輯子にとって年下の勉強仲間、遊び仲間である。1879.1ころ、16歳の輯子には縁談が調いつつあったのではないかと。そこで跡見生活の思い出のために、輯子は跡見花蹊に山水画を一枚ねだった、そしてついでに(どちらが「ついで」なのかは分らないが)学友たちが前年に合作した花卉図をもねだった。願いはかなえられ、1月か2月には二枚のめぐりが輯子の手許に届いたのだろう(花蹊が輯子の願いに応じて「万山疊翠図」を画いたのかどうかは分らない、もしそうであるなら為書きが有ってもよさそうなものだが、それはない。しかし一方、「万山疊翠」という画題には、既述したように「旺盛な生命力、一族の繁栄などが含意されている」ことは注目されてもよい)。それを表具屋に出し(急いでも、袂装には通常一月やそこらはかかる)、3月には桐箱に納めて届けられた。そののち、輯子はこの桐箱を嫁入り道具の中に加えて、いずれかの家に嫁いでいった。だがこの結婚は、何らかの事情により破綻した。輯子は、かつて持参した双幅の絵画とともに、竹内家に帰ったのだろう。

この後、既に記したように1900.6-1902.5の間に、37乃至39歳の輯子のもと松代藩主、伯爵真田幸民に嫁いだ。輯子は再婚(おそらく)、幸民は三婚という夫婦であった。しかし、今回の結婚生活も永くは続かなかった。1903.9.6に夫幸民が54歳で歿したからである。時に輯子は40歳に過ぎなかった。真田家の家督は、幸正(1876.3.7-1917.1.11)が相続して、第11代当主となった。輯子は、その真田家の前当主未亡人として、麻布区材木町56に余生を送り、1928.10.15、65歳でここに歿した。花蹊と生徒合作の双幅は、真田家に家宝として遺された。1966第12代当主真田幸治(1901.4.28-1987.10.17)は、真田家歴代の家宝を一括して松代町(同年長野市と合併)に寄贈し、それらは1969開館した真田宝物館(長野市立)に収蔵され、今日に至っている。

おわりに

以上のように、竹内輯子、後の真田輯子は、結婚生活には恵まれず、幸薄き印象をぬぐえない。その輯子にとって、少女時代の跡見女学校時代の明るく、楽しかった思い出は、懐しく、貴重なものだったのではないかと。「お師匠さん」跡見花蹊と、同僚の生徒達の絵画を請い受け、自ら双幅に仕立てると、そののち50年間近く一生手許に置いていた。箱や軸の保存状態を見ると、軸はあまりひろげられておらず、箱すらほとんど開けられていないように見える。それにもかかわらず、箱表は摩耗が進んでいる。それは、輯子がこれを常に自分の道具として手許に置いていたことを推測させる。以て輯子の心中を思い遣るに足る、と思う。

この双幅の存在を知りえたことは、跡見学園にとっても重要な意味を持つ。既述したように、この双幅は制作時から今日に至るまでの収蔵歴に、曖昧な点がない。しかも生徒合作「花卉図」は、知られている類品中の優品である。したがって、この双幅は跡見花蹊及び最初期の跡見女学校を研究するための貴重な第一級の基本資料である。以てここに紹介した所以である。

(2013.8.17於緑蔭浄几山房)